

特集
「日本人」
「名詞」
翻訳
【Translation】

翻訳と方言

映画の吹き替え翻訳に見られる日米の方言観

ダニエル・ロング
朝日 祥之

1 はじめに

本論は日常的な経験とそれに対するささいな疑問から生まれたものである。数年前に筆者（ロング）がアメリカ映画の日本語吹き替え版で、黒人の登場人物はみんな東北弁で話していることに気付いた。また、老人が登場すると人種に関係なく広島弁をしゃべる。こうした映画を見て、「なぜアフリカ系のアメリカ人は日本の東北弁を話すのか」、そして「なぜ人が年を取ると広島弁になってしまうのか」と不思議に思った。

娯楽産業の方言利用はもちろん外国語からの翻訳の問題にとどまるわけではない。アメリカでは、ニューヨーク訛

りや南部方言を売り物にしているコメディアンが多い。日本でも関西弁を使うコメディアンが大勢いる。ここで共通していることは、本人が出身地の方言を使っていることである。時によってはそれを誇張していることもあるが、これは自分「本来」のしゃべり方である。

その一方、役者が他の方言を使って演じることもある。アメリカでも、日本でも、「方言指導」が一つの職業として成り立っているぐらい、方言というものがマスメディアに頻繁に登場するようになっていく。フィクション作品に使われる方言は一つのシンボルとして利用されることが多いのである。

アメリカのテレビ番組からの例を考えよう。一九九七年から放送している「サウス・パーク」は大人向けのアニメ

番組である。登場する四人の母親の性格は、対照的である。

そして、舞台は西部のコロラド州となっているが、なぜか違った訛りで英語を話している。中西部の訛りで話す二人の母のうち、一人はしっかりしているまじめな人、もう一人は男好きの未婚の母である。一方、お節介なユダヤ人の母はニューヨーク訛り、貧困にあえぐ無知な母は南部訛りでしゃべる。その上、毎週アメリカ全土に住む数万人の視聴者がこの番組を見てそのユーモアを理解していることは、視聴者がこれらの固定観念（ステレオタイプ）を容認していることを示唆しているのである。

アメリカでは、方言でしゃべることは知的障害の表れだという潜在的意識があるようである。日本でも放送される「ザ・シン普森ズ」というコメディで、大人並みに優れた能力を持つ小学生のリサが、自分は大人になると頭が極端に悪くなる先天性の病気にかかっていると心配するエピソードがあった。このキャラクターは普段、標準米語に近いとされている中西部英語を話しているが、先々脳細胞が減少した自分を想像するシーンでは、その将来の自分はなぜか著しい南部訛りに変わっていた。これはジョークだと言えが、その裏にある考え方を明示している。すなわち、「南部の人が南部訛りを使っているのは、彼らは無知だからだ」という因果関係がこの考え方の背景に潜んでいるのである。

2 問題

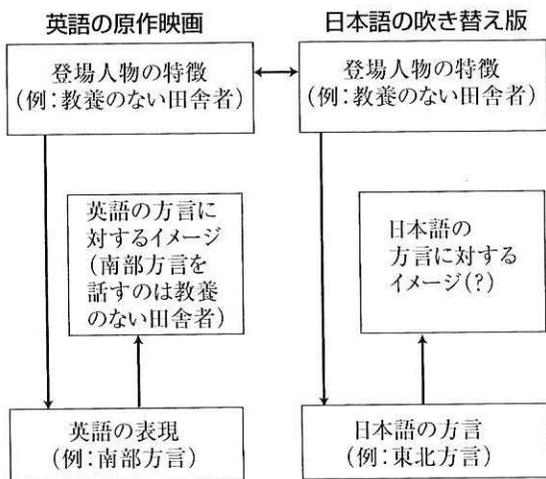
こうした方言に対する意識は言語学者にとって未開拓の領域ではない。むしろ、方言学者、変異理論の言語学者、そして社会心理学者は、昔からこうした課題を追究している。方言意識を調べる方法は、アンケート、質問票を使った面接、テープ聞かせの実験など、さまざまであった。そこで、本稿では、マスメディアに現れる方言のステレオタイプを研究することによって一般人の方言意識を解明する方法を提案したい。

本稿は、映画のセリフに見られるある登場人物の方言の使い方、脚本での方言使用の意義、役割、位置付けを材料に、言語意識、殊に方言のような言語的変異に対する人々の意識を研究することを目的としている。四つの映画（「風と共に去りぬ」「バック・トゥー・ザ・フューチャー」「星の王子様ニューヨークへ行く」「マイ・フェア・レディ」）に注目し、登場人物の日本語と英語のセリフに見られる方言的特徴を挙げる（注1）。

図1に示すように、この特徴が、登場人物の背景とのかかわりの中で、どのようなイメージを作り出しているかを、英語と日本語の場合において説明・比較する。例えば、ある映画に登場する無教養の田舎者は原作で南部訛

りの英語を話している。これは、「南部方言は無教養の田舎者が話す言葉である」と示唆している。日本語の方言に対するイメージを調べるためには、その方言がどういう登場人物に使われているかを調べればよい。日本語吹き替え版で、この無教養の田舎者は東北弁を使わされている。したがって、日本で「東北弁は無教養の田舎者が話す言葉である」というイメージがあることが分かる。

図1. 登場人物と方言イメージの関係



3 セリフの方言的特徴

まず、田舎に住む黒人の場合を考えてみよう。「風と共に去りぬ」に登場する黒人の使用人達（プリシー、マミー、ポーク）に注目する。プリシーは、成人はしたものの、子供っぽい面が多く残っており、知的ではないが、自分が使用人でありながらわがままを主人に対して言っている。強がっている一方で、何事にも、たじろいでしまふ気が弱い面もある。マミーは、プリシーとは正反対の性格の持ち主で、気が強く、世話好きで、自我の強い中年女性である。ポークは穏やかで、心が広く、献身的で、頼りにされやすい中年の男性である。ここでは、戦火を逃れて、自分の家に帰ってきた主人公スカーレットとプリシーが、久しぶりに、マミーやポークと再会するが、何もかもが変わってしまった現実絶望する場面を取り上げる。彼らのセリフの一部を挙げると、

プリシー「牛なんていらねえですよ。もうすぐなのに。おら、牛が恐いだもん。」
 ポーク「納屋なんざ、もうねえですよ。北軍が焚き木にしちいました。」
 マミー「はい、燃やさねえもんは盗みました。着る

物やら、敷く物やら何でも手当たり次第に。……食べ物もねえですよ。盗まれちまうて。」

このセリフに見られる言語学的な特徴として、次のことが言える。「おら」は、津軽弁や仙台方言などに散在する、「おれ」から転じた形の東北弁である。そして、「ねえ」は否定辞「ない」の連母音[E]が[ɔ]に音韻変化したものであるが、これも東北方言で使用する形である。ポークが使う「なんざ」は「なんか」の「か」が「ざ」に変化した形であるが、関東地方で使用されている。否定辞の「ねえ」はマミーとともに見られる。「しちました」は「してしまいました」の「て」が後接の「し」の影響を受け、逆行同化したものである。マミーの「ちまった」も同様の変化であると言える。

さて、これらのセリフは、英語ではどう表現しているであろうか。先に挙げたセリフを見てみることにする。

プリシー：We don't need no cow Miss Sca(r)let.

We'll be home soon. And I's sca(r)red of cows.

ポーク：Dey ain't no ba(r)n no mo(r)fe Miss Sca(r)let.

Da yankee's done wen(t) n' burn(ed) it fo(r) fit(r)wood.

マミー：Dey use(d) da house fo(r) dey headqua(r)ter(s). Miss Sca(r)let. Yessum. And dey stole mos(t) eve(r)yhing dey dint(t) burn. All da clo(th)es an(d) all da rugs. Dey ain't no(h)n'in' to eat honey. Dey took it all.

音韻面では、母音後の /r/ が欠如している。また、 /θ/ や /ð/ の唇歯音は、歯茎音の [t] や [d] に変わる。さらに語末の /r/ や /d/ を含む子音群に起こる「r 削除規則」も見られる。これは相当強力な規則で、mos(t) のように単一形態素の場合だけではなく、use(d) のように、/r/ や /d/ が別の形態素になつており、文法的な情報を含んでいる場合にも起こり得る現象だ。一方、文法面において、be 動詞活用の単純化で、'I's (標準英語で I am) が使われている。そして、標準英語ではおかしいとされている多重否定などに見られる。さらに、話者が見て残念に思っているモダリティを表す went and did という非標準的な表現もある。

「風と共に去りぬ」では、南北戦争時の黒人による英語とその日本語の吹き替えにおける特徴を見てきたが、ここでは、「星の王子様、ニューヨークへ行く」を挙げ、現代の黒人の英語とその日本語の吹き替えに見られる特

徴を、白人の英語との比較を通して見ることにする。
 ニューヨーク・クウィーンズ街にある理髪店の黒人店員とユダヤ人の白人の客とのやりとりの場面である。白人老人は、一見穏やかに見えるが、我が強く、また知的な一面も持ち合わせている。そして、理髪店の黒人店員であるが、陽気で垢抜けた性格である。ボクシングについては、二人とも信条を持って、頑固な一面も持ち合わせている。彼らのセリフの一部を挙げると、

理髪店の黒人老人「だめなんて言っちゃいねえ。だけど、わしは、あいつが嫌いになつたんだい。モハメット・アリーなんて名前に変えやがった」

ユダヤ人の老人「おい、こらこら、ちよつと待って。人間は誰だって自分の好きな名前を名乗る権利つてもんがあるじゃねえのかい」

最初に、理髪店の黒人店員のセリフに見られる特徴に注目する。まず、一人称の「わし」に注目したい。この「わし」は、全国各地に散在しているが、昔話に登場する老人がよく使っており、「わし」は老人が使用する一人称であるというイメージが強い。また、否定辞「ねえ」

の使用も見られた。ここで特筆すべきことは西日本を中心に使われる「わし」と東日本を中心にして使われる「ねえ」とが同一の登場人物により使用されていることである。また、クウィーンズ街に住む人の社会的背景を考慮に入れて、くだけた言い方である「変えやがった」も見られる。

白人老人のセリフについても、基本的には、黒人老人のセリフについて述べたことに類似する。否定辞の「ねえ」の使用や「という」が変化した形「って」である。社会的背景を反映するために、方言やくだけた表現を使用していると解釈できる。

この場面での英語のセリフを見よう。

理髪店の黒人老人：I ain't sayin' Clay ain't bad. I'm just sayin' I stop(ped) likin' Cassius Clay once he change(d) his name to Muhammad Ali.

ユダヤ人の老人：Wait a second. A man has a right to change his name to whatever he wants to change it to.

白人は、中央ヨーロッパ出身のユダヤ人の典型的特徴である[w]の代音としての[v]を多用している。また、/h/

が軟口蓋摩擦音[x]、/h/には口蓋垂ふるえ音[ɣ]がそれぞれ使われているのも、この「ユダヤ人英語」の雰囲気をもし出すためであろう。

これまで、黒人の英語とその日本語の吹き替えに見られる特徴を中心に見てきた。ここからは、白人英語に注目して、その英語と日本語の特徴を見てみたい。まず、映画「バック・トゥー・ザ・フューチャー」を挙げ、田舎に住む三〇年前の白人のセリフの特徴を見てみることにする。

ここでは、主人公マーティの車が納屋に突っ込んでしまい、それに驚いた農家全員がそこに見てきた場面を取り上げる。ここで、白人農家(父・母・子供)のセリフが方言を使用している。

母「とうちゃん。なんだあ。あ、あれ、なんだよお。」

父「飛行機みてえだがよ、つばさがねえぞお。」

子供「飛行機じゃねえよ。」

まず、母が使う「なんだあ」は、東北弁の一型アクセントを表現しているものと言える。「とうちゃん」は「ちち」の方言形であるが、「くだけた」場面で、直接話

しかける際に使われる東北方言である。

父が使う方言形「だがよ」は、接統助詞「だけど」に間投助詞「よ」が付いた形の方言形であるが、北関東地方で使用されている。また、否定辞の「ねえ」の使用が子供とともに見られる。これが「みてい」と同様に [ai] から [aɪ] へと変化した東北方言の特徴であると言える。

主人が納屋に入るときに持っていた、手提げランプやマーティを追い返すのに散弾銃を使ったり、子供が、オーバーオールズを履いているといった状況が、「田舎」という場面をかもし出している。その上、この場面が昔という時間的條件、マーティが見知らぬ所にいるという心理的條件、そして、自分が突っ込んでいった納屋が町から離れた場所という地理的條件などを表出するために、方言を使用したと言えよう。また、東北弁の使用が多く見られたのも、農家が使う言葉として見なされているものと言えるかもしれない。

ここでも、英語の特徴を見てみることにする。

母：What is it Paw?

父：Looks like a airplane without wings.

子供：That ain't no airplane. Look.

語彙では、「お父さん」を意味する Paw が使われてい

る。これは、広い分布を持つ非常に素朴に聞こえる「田舎言葉」と言える。先に見た黒人英語とは対照的で、主に白人の間で使われる。また、父親役のセリフには、母音で始まる名詞の前に不定冠詞の *a* が用いられている。不定冠詞の使い分けをなくすことで単純化を図ったこの表現は、白人の間でも、黒人の間でも使われている。そして、黒人のセリフにも見られた *me* (人称と数と関係なく使われている be 動詞の否定形) と二重否定の使用が目立つ。この二つの形式は英語圏のほぼ全域にわたってあるが、義務教育の規範文法で最もよく「矯正」的にされる典型的な「悪い英語」表現と断言してよさそうである。

「バック・トゥー・ザ・フューチャー」では、田舎に住む農家の英語と日本語に見られる特徴を見たが、ここでは、都会に住む現代の白人の英語、および、日本語の特徴を見てみることにする。「マイ・フェア・レディ」を例に挙げ、ロンドンに住む、白人のセリフに注目する。

エライザはロンドンに住む労働階級の白人女性である。気が強く、しつかり者である。教養はないものの、自分で生き抜いていこうとする姿勢が印象的である。そ

して、エライザの父、ドゥーリトルは同じ労働者階級の男性であるが、陽気で穏やかで気さくな性格の持ち主である。その反面、雄弁家で、教育を受けることはほとんどできなかったが、その演説ぶりは目を見張るものである。ヒギンズ教授の誘いを受け、エライザは自分のコックニー(ロンドンの労働者階級)訛りの英語を修正するためのレッスンを受ける。そのことを知った父、ドゥーリトルがヒギンズ教授宅に押しかけていき、娘の話をして、五ポンドをせしめる場面に注目する。

エライザ「なんて、げしん(下品)なこというんだよ。おめえは紳士じゃねえよ。あたいはもう21になるんだ。おめえみたいな大人には気をつけなければな。」

父ドゥーリトル「いやあ、ありがてえ。どうも…なんだ、エライザじゃねえかあ。…もうちょっとおとなしくしねえと、だんなに嫌われるぜい。」

このセリフの特徴を見てみよう。まず、エライザであるが、「おめえ」の使用に連母音[ei]から[eɪ]への融合化が見られる。また、関東方言で特徴的である、/hi:/ 対

応した[si:]を使用する点、「げしん」[gesɪn] (cf. 「げしん」[ge:ʃɪn]) の使用に見出すことができる。また、一人称の「あたい」が使用されていることにも注目したい。これは、主に関東地方(東京・埼玉等)で使われている。次に、父ドゥーリトルであるが、エライザのセリフの特徴と類似する点が多い。連母音の融合化もここでは見られる(例: 「ねえ」「ありがてえ」。また、「ちよっと」[tʃɪotɔ] から「ちっと」[tʃɪtɔ] への音韻変化もまた見られた。

この特徴は、主に東北部から関東にかけて広く分布しているが、ここでは、一般的に関東方言であると言つてよからう。また、非標準的な言い方と受け止められる表現も見られる。つまり、上述した方言形はなおさらではあるが、他の表現「いうんだよ」や「気をつけねばな」、「嫌われるぜい」などを使つてぞんざい感を出している。

これらの特徴から、エライザとドゥーリトルの二人は、父親と娘という年代的に見れば、中年、若年という違いが認められるが、ここで挙げたセリフから判断する限りでは、年齢による違いはあまりない。それよりはむしろ、ヒギンズ教授などが上流階級であり、その一方、この二人は労働者階級であるという社会的地位による違いを浮き彫りにするために、方言を使用しているのではないかと思われる。その社会的地位の違いはエライザやドゥー

リトルとヒギンズ教授との服装の違いにも表れており、エライザとドゥーリトルが「地位が低い」ことを示していると言えよう。

この場面での英語のセリフを見よう。

エライザ: You're no gen(t)lemen, you're not, to talk
o(f) such things. I'm a good(d) girl, I am. An(d) I
know what(I) the likes o(f) you are, I do.

母音後の *h* が声門閉鎖音になる。そして、文末に、主語と動詞のみが繰り返されるといふ付加断定文の使用がエライザのセリフに頻用される(I am a good girl I am, など)これらはコックニーの特徴としてよく指摘されるので、一般の映画観客にも通用するものである。

父ドゥーリトル: (ヒギンズ教授に) Thank ya gov'nor,
thank ya. Per(h)aps another time. (エライザに
気づいて驚へ) Bye me, it's Elizal! She does me
credit, don't she gov'nor? (エライザに) Now,
now, now, you (h)old your tongue and don't
you give these gentlemen none of your lip. (ヒ
ギンズ教授に) If you (h)ave any trouble wit
(h)er gov'nor.

表1.登場人物の特徴と英語・日本語の特徴

登場人物	特徴	英語	日本語
プリシー	黒人の大農園奴隷	黒人俗英語	東北方言
ポーク		黒人俗英語	関東方言
マミー		黒人俗英語	東日本方言
散髪屋の黒人老人	都会の労働者階級	黒人俗英語	東北弁・広島弁
ユダヤ人の老人		ユダヤ人英語	東日本方言
農家の父	30年前の白人農家	米国南部の英語	東北方言
農家の母		米国南部の英語	東北方言
農家の子供		米国南部の英語	東北方言
エライザ	都会の労働者階級	コックニー	関東方言
ドゥーリトル		コックニー	関東方言

語彙面において、governorというコックニーのステレオタイプ的な単語が見られる。これはgovernor（旦那）の簡略形で、上流階級などの目上の人に対して使われる敬称である。感嘆表現のBly meもコックニーの象徴的な言い方である。音韻面では、*W*の脱落が目立つ。これもコックニーの典型的な特徴と言える。上の黒人英語にも見た*W*の音韻的变化がイギリスの白人の間で使われる言語変種に現れるので、*with*が[wɪθ]となる。文法面では、人称によって使い分けられた動詞形が統一されたために生じた三人称単数形の *'(she) don't* はコックニー英語だけではなく、英語のさまざまな非標準的変種に見られる表現である。この語法は否定形のみに起きるものである。また、*'don't you give none* の二重否定も、英語圏に広く分布している方言形式である。

これまで、四つの映画に登場する一〇人のセリフを言語学的に分析し、脚本家がどのようにこれらの人物に方言を使用させるかについての考察を試みてきた。この分析から表1に示すように、次のことが言える。まず、各登場人物のセリフには、東北・関東方言と思われる形が見られること、広い分布を持つ非標準的な言い方を使っていることが挙げられる。そして、その方言を使用して

いる各人物はさまざまな社会背景を持ち合わせているのである。人種による違い（黒人か白人か）や、年齢による違い（若年か中年か老年か）、そして、性による違い（男性か、女性か）などの違いがあるが、ここで注目すべきことは、これらのさまざまな社会背景を持つ人物が、似通った方言形を使用していることである。[æ]や[ɛ]が[eɪ]に変わるといった連母音の融合化などは共通して用いられている。

4 「方言」がなぜ使われるか

以上見てきた映画の登場人物の特徴を表1でまとめた。ここで、それぞれの役がどういう属性と性格を持つ人間であり、そしてどういう言語学特徴を使っているかが分かる。黒人が東北弁を使い、コックニーは関東方言を使うなどというパターンが見えてくるが、そもそも映画のセリフを他言語に訳するときに、なぜ方言を使う必要があるのだろうか。次のような説明ができると思われる。

われわれが使っている発話は「情報機能」と「象徴的機能」の二つの側面を持っている。「情報機能」は発話の内容の部分で、「象徴的機能」は話者自身に関する付

随的な情報が含まれている（真田信治、ダニエル・ロング・一九九二）。今回分析した映画では、「情報機能」を果たす部分を翻訳するのは簡単だった。黒人奴隷のポークが言う「Dey ain't no ba(r)n no mo(r)el」を「納屋なんぞ、もうねえですよ」に訳すれば、文字通りの意味が伝わるが、それはこの伝達信号の半分にしかならない。アメリカ人の映画観客がこのセリフを聞くと、黒人話者のイメージが浮かんでくるが、セリフを日本語に訳すれば、そうした話者の属性に関する情報をどのように伝えればよいかが問題である。現本の登場人物が観客にどのような人間として写っているかを翻訳家が突き止め、それと似たようなステレオタイプを持つ日本方言を利用する以外にこうした情報を伝える方法がない。

こうした理由で使われる日本語の方言は象徴的なものであり、しかも方言の専門家ではなく、一般人のために使われているので、言語学的に正確な方言である必要はない。また、特定の方言である必要もない。むしろ、場合によって、人物の二つの特徴を表現するため、異なった方言特徴が混用されることすらある。今回の黒人老人が「老人語」と意識されている中国地方の方言と黒人の話し方として定着している東北弁の両方の特徴が混ざったセリフを使うのもこの例に当たる。今回扱った資料で、

東北方言が教養のない社会的に身分の低い人々のセリフに使われていたので、東北方言が決して良い方に写っているとは言えない。これまでの方言意識研究でも、こうした方言イメージがたびたび取り上げられた。井上史雄（一九八九）のSD（意味微分）法による方言イメージ研究では、「東北弁」が「若い女性にふさわしくない」、「ぞんざい」、「悪いことば」、「乱暴」、「汚い」といった否定的な特徴と結ばれることが多かった。こうした傾向が、東京や札幌、京都の出身者の間だけではなく、東北出身者の間にさえ見られたのである。今回の分析に見られた無教養な下層階級話者による東北弁の使用にもこれに通じるところがある。

さて、以上、日本語吹き替え映画の場合に使われる方言の特徴と、方言を使われる登場人物の特徴を見てきたが、この問題を反対から考えてみよう。すなわち、方言を使わない登場人物とはどういう役かということである。

英語の映画では、方言指導者による正確な方言が使用されているものの、それが日本語の吹き替え版になると標準日本語で話されているのがしばしば見られる。これは、主人公を含めた中心人物が、同一の社会背景を持っている場合に見られる。例えば、黒人が中心となる映画

（「ハーレムナイト」など）では、主人公たちが黒人英語を話していたが、吹き替え版では標準日本語が主に話されていた。また、スコットランド方言の英語が使われている映画（「ブレイブハート」など）でも、同様な傾向が見られる。これに関して、筆者（朝日）は、方言が使用されるのは「何か社会的に、主人公とは違う人物」が登場するときであろうと考えている。映画「ブレイブハート」で、アイルランド人が登場すると、非標準的な日本語を使用していた。映画の舞台以外の地、アイルランドから来たという理由で、この登場人物の言葉に変化を与えたのである。ここで、明らかにすることは、映画で、「黒人全員が〇〇弁を使う」とか「老人は皆〇〇弁を使う」ということではなく、映画の中で、ある登場人物を特徴付けるために日本語の方言が使われているということであろう。

5 おわりに

本稿で、外国映画の日本語吹き替えにおける方言の使い方を材料に、日本人が潜在的に持っている方言イメージを探ってみた。しかし、このような社会言語学的研究は、「研究のための研究」で終わってはいけないと思っ

ている。社会言語学は、社会と言語と関係を解明する学問であるならば、言語が原因となっている社会的問題を解決するために利用できるはずである。

以上で取り上げた映画を作ったアメリカでは、方言による差別が今日に至るまで、根強く残っている。これは去年、アメリカで起きた「エボニックス論争」に象徴される。日本の言語学者の長年による努力で、方言が「間違った日本語」や「怠け癖」ではないという認識が、専門家以外の一般国民にも広く普及したのである。日本でも、方言による差別は昔から現在に至るまで、堂々と行われているのは事実である。こうした方言差別をなくすためには、まず問題の実態を把握する必要がある。日本では、方言イメージ研究は長い歴史を持っており、そしてさまざまな方法論の利用によって、研究対象を複数の側面から接近することができた。本稿で提案した研究方法によって、社会の一般構成員が潜在的に抱いている方言ステレオタイプの今まで見えてこなかった側面から把握することができると思われる。

参考文献

- 井上史雄（一九八九）『言葉づかい新風景』（秋山書店）
- 真田信治・ダニエル・ロンク（一九九二）『方言とアイデンティテ

イ「言語」二二巻一〇号、七二〜七九頁

注

本稿では、大阪樟蔭女子大学の一九九四年度の対照言語学ゼミで提出された坂下寿美乃さん、山鋪明子さん、道上栄子さんの文字化資料を一部利用させていただいた。

（ダニエル・ロンク 大阪樟蔭女子大学助教授）
（あさひ・としゆき エセックス大学大学院生）

